ISSN 0289 − 4130

研究紀要

第30号

—設立35周年記念—

「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動 —関東・中部地方の事例研究— 尾田　識好

殻長・殻高組成からみた関山・黒浜式期の貝塚 古谷　渉

大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係 中川　莉沙

縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について 松浦　誠

ヒスイ輝石岩製の磨製石斧 上野真由美 柴田　徹 西井　幸雄 麻生　敏隆 坂下　貴則 小茂田　幹 大屋　道則

埼玉県内の緑色凝灰岩と管玉 山田　琴子 上野真由美 赤熊　浩一 小林まさ代 大屋　道則

関東地方における周溝持建物の系譜 福田　聖

埼玉県における横穴式石室の分類と編年 —無袖石室と片袖石室を対象に— 青木　弘

北武蔵児玉地域における内斜口縁坏の編年的位置づけ 山本　良太

盾持人埴輪頭部の分類と変遷について 長谷川啓子

鉄鏃からみた「征矢」と「野矢」についての予察 —埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に— 渡邊理伊知

古代寺院における食堂院の構造 —平城京遷都後の官寺を中心に— 香川　将慶

2016

公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　次

序

「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動 …… 尾田　識好　（1）
　―関東・中部地方の事例研究―

殻長・殻高組成からみた関山・黒浜式期の貝塚 …… 古谷　　渉　（19）

大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係 …… 中川　莉沙　（37）

縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について …… 松浦　　誠　（57）

ヒスイ輝石岩製の磨製石斧 …… 上野真由美
柴田　　徹
西井　幸雄
麻生　敏隆
坂下　貴則
小茂田　幹
大屋　道則　（69）

埼玉県内の緑色凝灰岩と管玉 …… 山田　琴子
上野真由美
赤熊　浩一
小林まさ代
大屋　道則　（79）

関東地方における周溝持建物の系譜 …… 福田　　聖　（87）

埼玉県における横穴式石室の分類と編年 …… 青木　　弘（107）
　―無袖石室と片袖石室を対象に―

北武蔵児玉地域における内斜口縁坏の編年的位置づけ …… 山本　良太（135）

盾持人埴輪頭部の分類と変遷について …… 長谷川啓子（149）

鉄鏃からみた「征矢」と「野矢」についての予察 …… 渡邊理伊知（163）
　―埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に―

古代寺院における食堂院の構造 …… 香川　将慶（181）
　―平城京遷都後の官寺を中心に―

鉄鏃からみた「征矢」と「野矢」についての予察
―埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に―

渡邊理伊知

要旨　埼玉県内の奈良時代・平安時代に属する遺跡から出土した鉄鏃を集成して時期や出土比率から検討を行った。その結果、埼玉県地域での形式ごとの割合は、尖根式が44％、広根式が36％、雁股式が15％、無頸式が５％となった。比較対象として、律令国家経営の最前線といえる城柵遺跡との比較を行ったところ、城柵遺跡での尖根式の鉄鏃の割合は81％であり、次いで広根式12％、雁股式５％、無頸式２％であり、尖根式の割合が圧倒的であった。これは、尖根式は主に征矢としての使用であり、それ以外の鉄鏃は武器以外が主目的で使用されていたことの現れであり、その主な使用目的としては狩猟等の生業に関わると想定したい。

また、埼玉県地域ではある程度の出土量が認められた棘箆被の鉄鏃が城柵遺跡からはほとんど出土しておらず、軍団兵士などは地元地域で使用していた鉄鏃を自弁していた可能性は低かったなどの可能性がある。

はじめに

鉄鏃を扱った研究としては、後藤守一と末永雅雄の両氏が先鞭をつけたといえる。後藤は鉄鏃を「有茎」「無茎」と茎の有無で大別し、鏃身形や箆被形から６種27類103目の分類を行った。「種」「類」「目」からの分類の礎を築いたといえよう（後藤1939）（註１）。また、後藤は正倉院御物として残る伝世品と『東大寺献物帳』の記載から奈良時代の鉄鏃の名称を「すこぶる困難」としながらも推定している（後藤1940）。

一方、末永雅雄は日本の武器・武具研究の中の一つとして鉄鏃を取り挙げている。古代から近世にかけての文献史料を用い、各種鉄鏃の名称を考察している。分類は大別して有茎式と無茎式とし「雁股式」「平根式」「尖根式」の三系統としている（末永1941、1969、1981）（註２）。

その後、鉄鏃の研究は古墳の副葬品を扱った研究が主流になっていく。古墳時代における鉄鏃研究の主なものとしては、小森哲也の「栃木県内古墳出土遺物考（一）―鉄鏃の変遷―」（小森1984）、小久保徹氏・浜野一重氏・利根川章彦氏・山本禎氏・高橋好信氏・田中正夫氏・岩瀬譲氏・瀧瀬芳之らの「埼玉県における古墳出土遺物の研究Ⅰ―鉄鏃について―」（小久保・浜野・利根川・山本・高橋・田中・岩瀬・瀧瀬1984）、杉山秀宏の「古墳時代の鉄鏃について」（杉山1988）等を挙げることができる。

一方で、古代・中世以降における研究としては前述の後藤・末永両氏以降は、津野仁による一連の研究が挙げられる（津野1990、1999、2001、2002、2007）。

津野仁の研究については、分類はまず大形式として『和名類聚抄』にある征矢を尖根式、鏑矢を広根式として、この大形式を構成する鏃身を小形式20項目以上に分類している。そしてその小形式がそれぞれいずれの大形式に属するかを正倉院伝世品や奈良県春日大社の本宮古神宝や若宮古神宝、一括性の高い遺構出土の遺物といった資料の各鉄鏃形式の割合から、それらが征矢か鏑矢かという使用状況を想定している。使用実態を踏まえた上での分類という点での新しい見解といえよう。

その他の鉄鏃の使用状況に関する研究としては、平野修が山梨県内における集落から出土した鉄鏃を武器という観点から集落内での所有形態について検討を行っている。それによると「ある特定の住居から出土する例が多く認められることなどから、一般農民はあまり所有することができず、ある特定の階層の人間が所有・管理に関与していた可能性が強い」(平野 1989) として「武器」という視点から検討を行っている。

他に「武器」すなわち「征矢」という視点から検討を行った研究としては、市川隆之が長野県の古代遺跡から出土した鉄鏃の集成を行い、佐久平地域では尖根式の鉄鏃の出土量が多い傾向にあると指摘している (市川 2011)。また、筆者は以前、城柵遺跡から出土した鉄鏃を集成したことがある。その成果としては城柵遺跡から出土した鉄鏃の 80%近くが尖根式の形式のものであった(渡邊 2015)。

一方で、種石悠は、鉄鏃を「狩猟」の道具として検討を行っている(種石 2014)。それによると、関東地方では古墳時代中・後期に平根系の鉄鏃が増加するという。この現象は、害獣の駆除や狩猟などが背景にあるとしている。また、甲信地方では鉄鏃に占める平根系の割合が高く、これは関東地方に類似するという。

鉄鏃の「祭祀」的な使用を想定している研究も見られる。前述の種石は、古墳時代の祭祀遺構から平根系鉄鏃が出土していることや、非実用的な大形の鉄鏃や異形平根系の鉄鏃が出土していることから、狩猟用の鉄鏃の祭祀・儀礼行為における使用を想定し、祭祀と関連をもっていたと示している (種石 2014)。

劔持和夫は、埼玉県東松山市に所在する反町遺跡から出土した雁股鏃と「神矢」と記された墨書土器等の遺物やその出土状況から「神矢神事は古代的狩猟儀礼に基づく、田猟の精神的核心を基底とした祭祀儀礼であり、執行の目的は、農耕をも含む大地の豊饒祈願である」と想定している (劔持 2009)。

狩猟に関わる祭祀以外のものとしては、松村恵司が千葉県東金市に所在する山田水呑遺跡の竪穴住居跡から出土した鉄鏃を出土状況から建築儀礼に使用されたものと考えている (松村 1995)。

また、小林康幸は中世遺跡から出土した鉄鏃を集成し、大別七項目に分類し、それぞれの形式の使用実態を想定している。鑿箭式と設定した形式 (A類) と鏃身が長三角形とした形式 (B類) は合戦用の征矢であるとし、雁股のもの (C類) は儀礼・祭祀的なものとしている。また、鉄製以外の木製や骨製のものを鉄製のものを模したものとし、すべての実用性を否定する根拠はないとしつつも祭祀的な性格なものと想定している (小林 1997)。

鉄鏃の研究は古墳時代を中心として分類に主眼を置いた研究が行われてきた。その一方で使用状況の検討は決して十分に行われているとはいえない。

鉄鏃の使用状況については、大きく分けると「武器」、「狩猟」、「祭祀」の3種の使用が想定されているが、現状では曖昧といわざるを得ない。

例えば雁股鏃を取り上げても、その性格については様々な見解が見られる。前述の通り劔持は雁股鏃の祭祀での使用状況の復元を試みている (劔持 2009)。

対して小林謙一は「特に鳴鏑や鏑矢に装着する雁又鏃は、武器矢に固有のものとして差し支えないであろう。」(小林 2004) と武器としての認識を示している。

飯塚武司は、『男衾三郎絵巻』に描かれている合戦の場面で描かれている鏃がみな雁股鏃であることに着目している (飯塚 1991)。『男衾三郎絵巻』では、笠懸などの訓練風景の場面で描かれている矢には「的矢」が描かれており、合戦の場面での「征矢」と描き分けられている。また、鳴鏑

を描いた雁股の矢も見られないことから、これらは上差矢として描かれているわけでもないといえよう。

『男衾三郎絵巻』は永仁３年（1295）頃に制作されたと考えられている『伊勢新名所絵歌合』との共通性があるとされており、同時期に制作されたと考えられている。時期こそ異なるが、雁股鏃の使用状況を検討するうえでの視座となるだろう。

このように、必ずしも鉄鏃の形式が使用の実態を反映しているものではないだろうが、有職故実研究においては、「征矢」、「野矢」、「的矢」（註３）といった分類が行われており（鈴木 1959a・b）、考古資料としての鉄鏃からもある程度の使用状況の検討は可能であろうと考えられる。

また、古墳時代以外の時代の鉄鏃研究を見ても、現状あまり活発とはいえない。その理由としては、古墳の副葬品として以外の鉄鏃の出土量があまり多くなく、一括性にも乏しいためであると考えられる。しかし、弓矢は前近代以前の日本においては、主力武器の一つであり、鉄鏃を検討することで、軍制や戦の復元が可能であるといえよう。

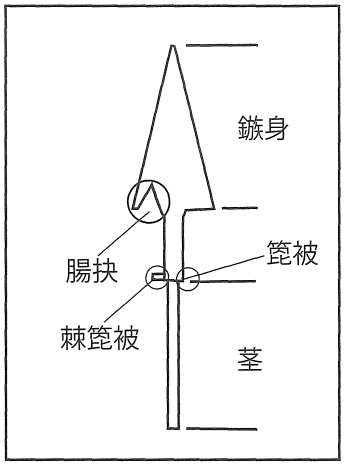
そこで、本稿では、埼玉県内の主に奈良時代・平安時代の時期に位置づけられる遺跡から出土した鉄鏃を扱い、使用状況の検討を試みる。

１．鉄鏃の分類

鉄鏃の分類基準としては、最も特徴的な部位である鏃身と箆被部分の棘の有無を中心に分類を行った。

なお、前述の通り筆者は以前、城柵遺跡から出土した鉄鏃の集成を行った。その際に分類も行っているが、本稿では、若干の変更を行っている。

具体的には、小三角形Ⅰ式及びⅡ式の分類基準を改めた。前稿（渡邊 2015）では、三角形式と小三角形式の区分として、「鏃身の長さ３㎝以下」の鉄鏃を小三角形式としたが、今回、埼玉県内の遺跡で集成と分類を行ったところ、2.8㎝など微妙な大きさのものが多々見られ、分類が曖昧になってしまった。そのため分類基準を鏃身と箆の長さの比率とした（註４）。また、広根式に鏃身の形が五角形となる形式を加えた。



第１図　鉄鏃の部位名称

鏃身に関してはまず有頸鏃と無頸鏃に分け、有頸鏃を広根・尖根の二つに大別し、鏃身形ごとに小別した（第１・２図）。

①広根式……鏃身の比率が箆に対して６頭身以下。

雁股Ⅰ式……鏃身の付け根部分がＵ字形の形状を呈するもの。

雁股Ⅱ式……鏃身の付け根部分がＶ字形の形状を呈するもの。

飛燕Ⅰ式……腸抉を有する鏃身形が正三角形のもの。

飛燕Ⅱ式……腸抉を有する鏃身形が横長三角形のもの。

飛燕Ⅲ式……腸抉を有する鏃身形が縦長三角形のもの。

三角形Ⅰ式……正三角形のもの。

三角形Ⅱ式……長三角形のもの。

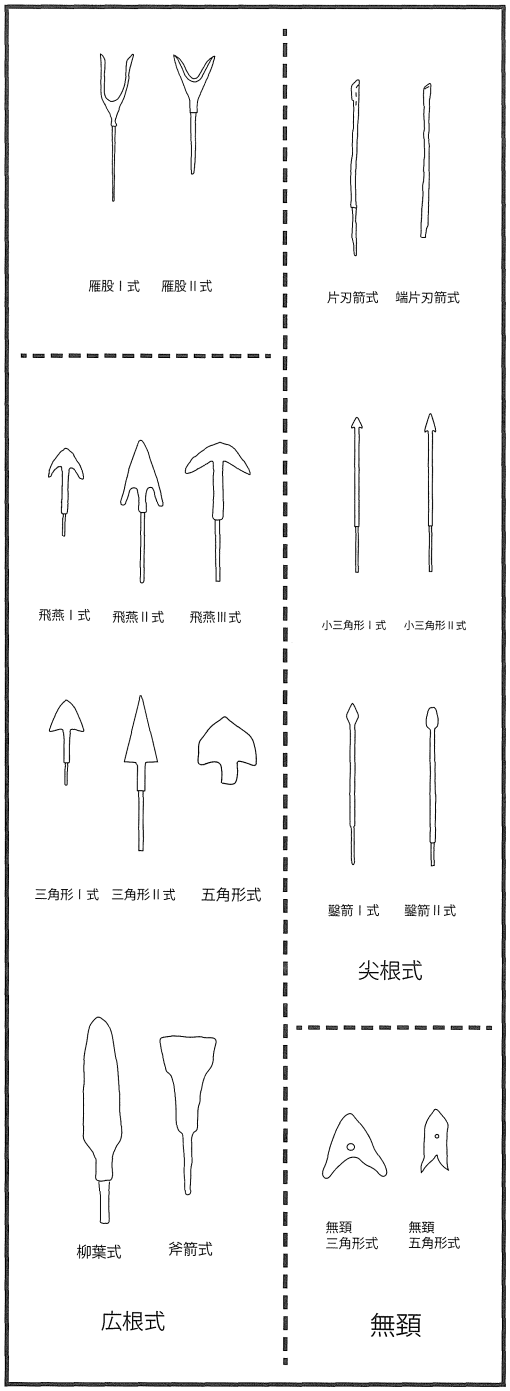
五角形式……五角形のもの。

柳葉式……鏃身横幅の最大部分が中心付近にあたるもの。

斧箭式……鏃身横幅の最大部分が先端付近にあたるもの。

②尖根式……鏃身の比率が箆に対して６頭身以上。

小三角形Ⅰ式…鏃身の比率が箆に対して６頭身



第２図　鉄鏃分類模式図

以上で正三角形のもの。

小三角形Ⅱ式…鏃身の比率が箆に対して６頭身以上で長三角形のもの。

鑿箭Ⅰ式……鏃身部分が角形のもの。

鑿箭Ⅱ式……鏃身部分が隅丸のもの。

片刃箭式……片側のみに刃が取り付くもの。

端片刃箭式……片刃箭式の先端部のみに刃が付く形式である。

③無頸式……鏃身のみで構成されているもの

三角形式……頸部の無い無頸の形状をし、三角形の形状をする。

穿孔をもつものがある。

五角形式……頸部の無い無頸の形状をし、五角形の形状をする。穿孔をもつものがある。

以上のように分類を行った。

２．鉄鏃の集成と地域ごとの様相

2011 年に開催された日本考古学協会栃木大会において、「古代社会の生業をめぐる諸問題」として全国規模で生業に関わる遺物の集成が行われた。その際に鉄鏃も生業に関わる遺物の一つとして集成の対象に加えられた。しかし、その他多くの生業に関わる遺物とともに取り上げられているため、形式ごとの集成にはなっていない（赤熊 2011）。

本稿では前述の分類に基づいて集成を行った（註５）。対象地域は埼玉県内の遺跡から出土したものとし、主な時期は７世紀後半～ 10 世紀後半までとした（註６）。以下、郡単位でそれぞれの様相をみていく。

足立郡（表１）

時期は、８世紀後葉から 10 世紀後半まで確認できた。

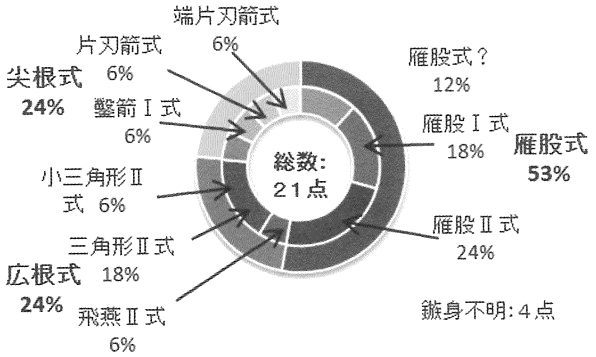
大山遺跡から三角形Ⅱ式が２点、鑿箭Ⅰ式が１点、下野田稲荷原遺跡から小三角形Ⅱ式が１点、

氷川神社東遺跡からは鑿箭Ⅰ式が１点、端片刃箭式が１点、三角形Ⅱ式が１点、飛燕Ⅱ式が１点、雁股Ⅰ式が４点、雁股Ⅱ式が３点、雁股式と思われるものが２点、鏃身不明のものが４点出土している。

氷川神社東遺跡から、雁股式の鉄鏃が多く出土しており、他の地域よりも雁股式の比率が高い傾向にあった。

なお、足立郡の南部は東京都に位置しており今回の集成は郡域の一部に限られる。

第１表　足立郡　鉄鏃形式比



入間郡（表２）

時期は、７世紀後半から 10 世紀初頭まで確認できた。

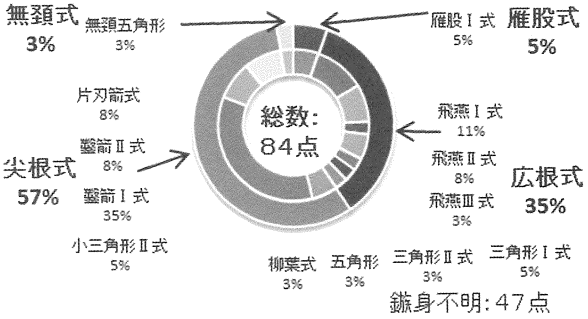
稲荷前遺跡から飛燕Ⅰ式１点、鑿箭Ⅱ式が１点、雁股Ⅰ式が１点、伴六遺跡から飛燕Ⅰ式が１点、片刃箭式が１点、鏃身不明が１点、番匠・道下遺跡から飛燕Ⅱ式が１点出土している。

東の上遺跡からは鑿箭Ⅰ式が 14 点、鑿箭Ⅱ式が２点、片刃箭式が２点、小三角形五角形式が１点、三角形Ⅰ式が２点、三角形Ⅱ式が１点、飛燕Ⅰ式が２点、飛燕Ⅱ式が２点、飛燕Ⅲ式が１点、柳葉式が１点、鏃身不明のものが 43 点出土している。

まま上遺跡から雁股Ⅰ式が１点、宮町遺跡から小三角形Ⅱ式が２点、若葉台遺跡から鏃身の判別が出来なかった鉄鏃が３点出土している。

入間郡内では、東の上遺跡が特筆される。尖根式の割合が高く、中でも鑿箭Ⅰ式の割合が高い。赤熊浩一は東の上遺跡は鉄鏃の出土量が多い傾向にあることを指摘し、「武器を多く集約する遺跡の性格」を想定している（赤熊 2011）。単に鉄鏃が多いのではなく、尖根式の鉄鏃が多いという点は、この想定を裏付けるものといえよう。

第２表　入間郡　鉄鏃形式比

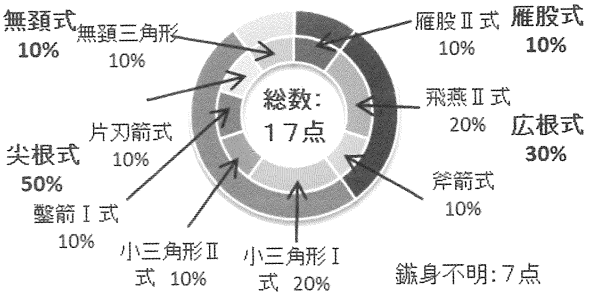


大里郡（表３）

時期は、７世紀末～ 10 世紀後半まで確認することができた。

北島遺跡から鑿箭Ⅰ式が１点、飛燕Ⅱ式が２点、鏃身不明のものが３点、下田町遺跡から無頸三角形式が１点、鏃身不明のものが３点、諏訪木遺跡から雁股Ⅱ式が１点、小三角形Ⅱ式が１点、古宮遺跡から斧箭式が１点、小三角形Ⅰ式が１点、宮下遺跡から小三角形Ⅰ式が１点、宮町遺跡から片刃箭式が１点、鏃身不明のものが１点出土している。

第３表　大里郡　鉄鏃形式比



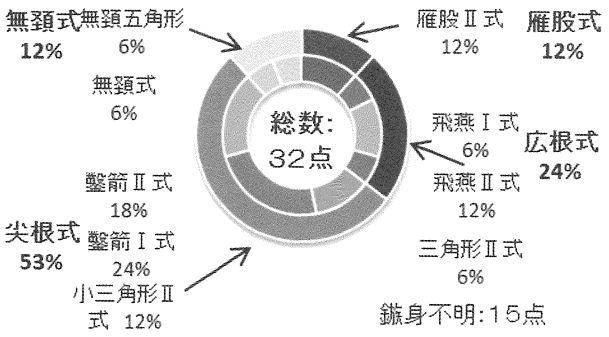
男衾郡（表４）

時期は、６世紀中葉から 10 世紀初頭まで確認できた。

如意遺跡から雁股Ⅱ式が１点、飛燕Ⅰ式が１点、飛燕Ⅱ式が１点、鑿箭Ⅰ式が３点、鑿箭Ⅱ式が１点、小三角形Ⅱ式が２点、無頸五角形式が１点、無頸式と思われるものが１点、鏃身不明のものが８点出土している。

如意Ⅲ遺跡からは雁股Ⅱ式が１点、鑿箭Ⅰ式が１点、鑿箭Ⅱ式が２点、鏃身不明のものが７点出土している。如意南遺跡からは飛燕Ⅱ式が１点、三角形Ⅱ式が１点出土している。

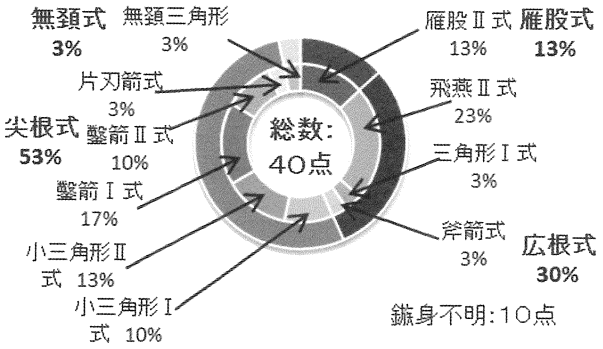
第４表　男衾郡　鉄鏃形式比



加美郡（表５）

時期は、７世紀末から 10 世紀末まで確認できた。将監塚・古井戸遺跡からは雁股Ⅱ式が１点、片刃箭式が１点、鑿箭Ⅰ式が１点、鑿箭Ⅱ式が３点、小三角形Ⅰ式が２点、鏃身不明のものが５点出土している。皂樹原・檜下遺跡からは鑿箭Ⅰ式が２点、小三角形Ⅰ式が１点、小三角形Ⅱ式が１点、斧箭式が１点、無頸三角形式が１点、鏃身不明のものが３点出土している。中堀遺跡からは雁股Ⅱ式が３点、飛燕Ⅱ式が７点、三角形Ⅰ式が１点、鑿箭Ⅰ式が２点、小三角形Ⅱ式が３点、鏃身不明のものが２点出土している。

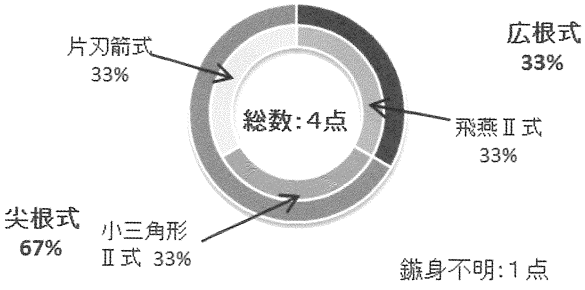
第５表　加美郡　鉄鏃形式比



児玉郡（表６）

時期は、９世紀前半のものを確認できた。地神遺跡からは片刃箭式が１点、鏃身不明のものが１点、塔頭遺跡からは小三角形Ⅱ式が１点、今井条里遺跡からは飛燕Ⅱ式が１点出土している。

第６表　児玉郡　鉄鏃形式比

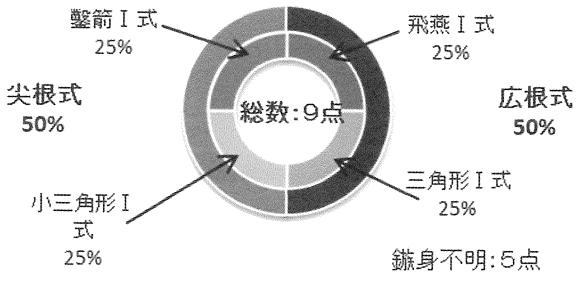


高麗郡（表７）

時期は、８世紀前葉～９世紀前葉まで確認することができた。

小山ノ上遺跡からは三角形Ⅰ式が１点出土、張摩久保遺跡からは鑿箭Ⅰ式が１点、道間遺跡からは飛燕Ⅰ式が１点、鏃身不明のものが２点、宮ノ

第７表　高麗郡　鉄鏃形式比



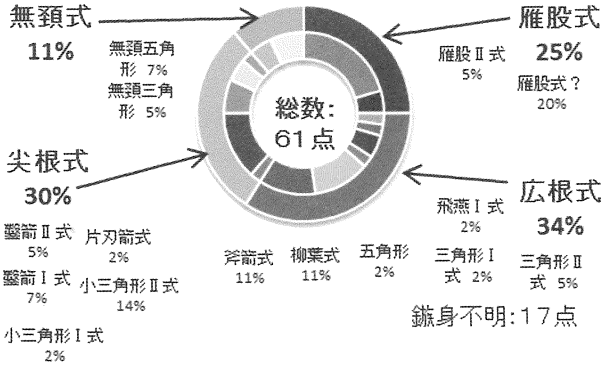
後遺跡からは鏃身不明のものが１点、横道下遺跡からは鏃身不明のものが１点、芳ヶ谷遺跡からは小三角形Ⅰ式が１点、鏃身不明のものが１点出土している。

埼玉郡（表８）

時期は、６世紀前半から10世紀後葉まで確認できた。

荒川附遺跡からは雁股式と思われる鉄鏃が１点、五角形式が１点、斧箭式が１点、鑿箭Ⅰ式が２点、鑿箭Ⅱ式が１点、小三角形Ⅰ式が１点、小三角形Ⅱ式が６点、無頸三角形式が１点、無頸五角形式が３点、鏃身不明のものが12点出土している。飯積遺跡からは鑿箭Ⅱ式が１点、無頸三角形式が１点、鏃身不明のものが２点出土している。築道下遺跡からは飛燕Ⅰ式が１点、三角形Ⅰ式が１点、三角形Ⅱ式が１点、片刃箭式が１点、鏃身不明のものが３点出土している。椿山遺跡からは雁股Ⅱ式が２点、雁股式と思われる鏃身のものが４点、雁股式か斧箭式か判別がつかないものが４点、斧箭式が４点、柳葉式が５点、三角形Ⅱ式が１点、鑿箭Ⅰ式が１点出土している。

第８表　埼玉郡　鉄鏃形式比

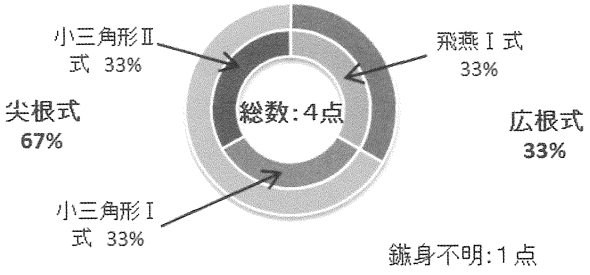


新座郡（表９）

時期は、８世紀後半と９世紀後葉のものを確認できた。

中道・中道下遺跡からは小三角形Ⅱ式が１点、鏃身不明のものが１点出土している。宮台・宮原遺跡からは飛燕Ⅰ式が１点、小三角形Ⅰ式が１点出土している。

第９表　新座郡　鉄鏃形式比

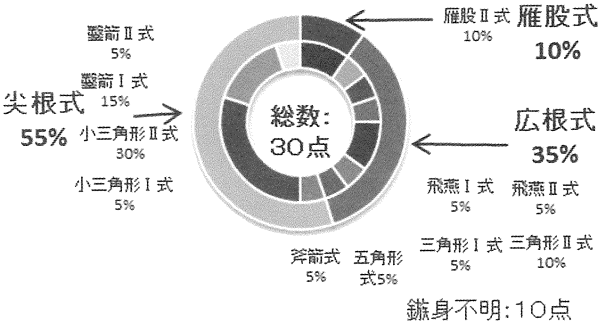


幡羅郡（表10）

時期は、７世紀末から10世紀前半まで確認することができた。

飯塚北遺跡からは雁股Ⅱ式が１点、鑿箭Ⅰ式が１点、鑿箭Ⅱ式が１点、小三角形Ⅱ式が２点、鏃身不明のものが５点出土している。飯塚北Ⅱ遺跡からは雁股Ⅱ式が１点、飛燕Ⅱ式が１点、三角形Ⅰ式が１点、五角形式が１点、鑿箭Ⅰ式が１点、小三角形Ⅱ式が３点、鏃身不明のものが３点出土している。在家遺跡からは鏃身不明のものが１点出土している。下辻遺跡からも鏃身不明のものが１点出土している。下郷遺跡からは三角形Ⅱ式が１点出土している。下郷・北下郷遺跡からは飛燕Ⅰ式が１点出土している。幡羅遺跡からは三角形Ⅱ式が１点、斧箭式と思われるものが１点、小三

第10表　幡羅郡　鉄鏃形式比



角形Ⅰ式が１点、小三角形Ⅱ式が１点、鑿箭Ⅰ式が１点出土している。

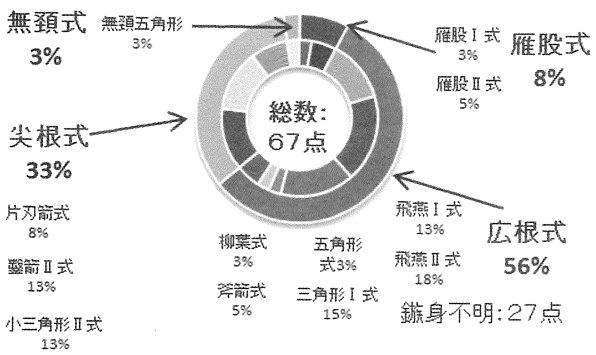
榛沢郡（表 11）

時期は、７世紀後葉から 11 世紀代まで確認することができた。

大寄遺跡からは雁股Ⅱ式が２点、三角形Ⅰ式が１点、飛燕Ⅰ式が２点、飛燕Ⅱ式が１点、柳葉式が１点、片刃箭式が１点、小三角形Ⅱ式が４点、鏃身不明のものが２点出土している。上宿・台遺跡からは飛燕Ⅰ式が１点、小三角形Ⅱ式が１点出土している。北坂遺跡からは飛燕Ⅱ式が１点出土している。熊野遺跡からは三角形Ⅰ式が３点、五角形式が１点、飛燕Ⅰ式が１点、飛燕Ⅱ式が３点、片刃箭式が２点、鑿箭Ⅰ式が１点、鑿箭Ⅱ式が３点、無頸五角形式が１点、鏃身不明のものが８点出土している。皿沼西遺跡からは飛燕Ⅱ式が１点、鏃身不明のものが５点出土している。上敷免遺跡からは鑿箭Ⅱ式が１点、鏃身不明のものが１点出土している。新田遺跡からは鏃身不明のものが１点出土している。台耕地遺跡からは三角形Ⅰ式が２点、飛燕Ⅱ式が１点、斧箭式が１点、鑿箭Ⅱ式が１点、鏃身不明のものが 10 点出土している。中山遺跡からは斧箭式が１点出土している。宮西遺跡からは雁股Ⅰ式が１点、飛燕Ⅰ式が１点出土している。

榛沢郡では広根式の割合が最も高かった。

第 11 表　榛沢郡　鉄鏃形式比

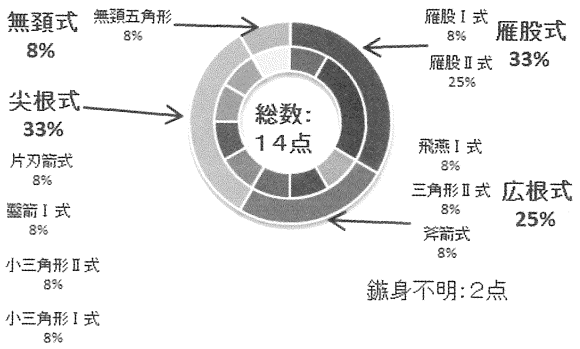


比企郡（表 12）

時期は、７世紀末から９世紀後葉まで確認することができた。

耕地遺跡からは鏃身不明のものが１点出土している。西浦遺跡からは三角形Ⅱ式が１点出土している。谷ツ遺跡からは飛燕Ⅰ式が１点出土している。天神台東遺跡からは鏃身不明のものが１点出土している。大西遺跡からは無頸五角形式が１点出土している。銭塚遺跡からは斧箭式と思われるものが１点、鑿箭Ⅰ式が１点、小三角形Ⅰ式が１点、小三角形Ⅱ式が１点出土している。山王裏遺跡からは雁股Ⅱ式が１点出土している。反町遺跡からは片刃箭式が１点、雁股Ⅰ式が１点、雁股Ⅱ式が２点出土している。

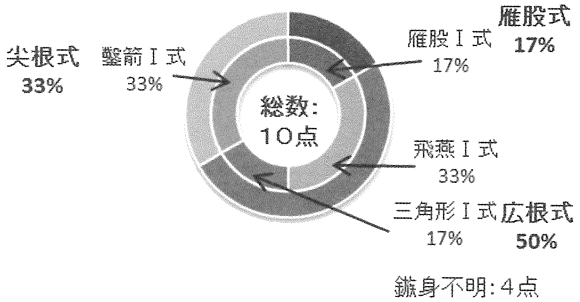
第 12 表　比企郡　鉄鏃形式比



下総国葛飾郡（表 13）

時期は、８世紀前葉から８世紀後葉まで確認することができた。

第 13 表　葛飾郡　鉄鏃形式比



八木崎遺跡からは雁股Ⅰ式が１点、飛燕Ⅰ式が２点、三角形Ⅰ式が１点、鑿箭Ⅰ式が２点、鏃身不明のものが４点出土している。

下総国葛飾郡の一部に留まる。

３．出土量の推移と傾向

鉄鏃の出土量の推移を表 14 に示し、一部を第３・４図に示した。おおよその傾向としては、７世紀末～８世紀前半にかけての時期に出土量が多く、その後８世紀後半から９世紀中頃にかけてやや落ち込むが、９世紀後半頃に再び出土量が増加し、以後減少していく。

その中で、特徴的な状況としては、尖根式は７世紀末頃から８世紀末頃にかけて一定量出土している。鉄鏃全体の出土量が落ち込む８世紀後半頃にも出土量を落としていない。すなわちこの時期には鉄鏃全体の中で尖根式の割合が高くなるといえる。その後、尖根式は９世紀代以降に出土量が減少していく。

９世紀前半頃、尖根式が減少していく状況に比例するように広根式と雁股式の出土量が増加し、９世紀後半頃には出土量が逆転する。しかし、10 世紀代には尖根式と同様に減少していく。

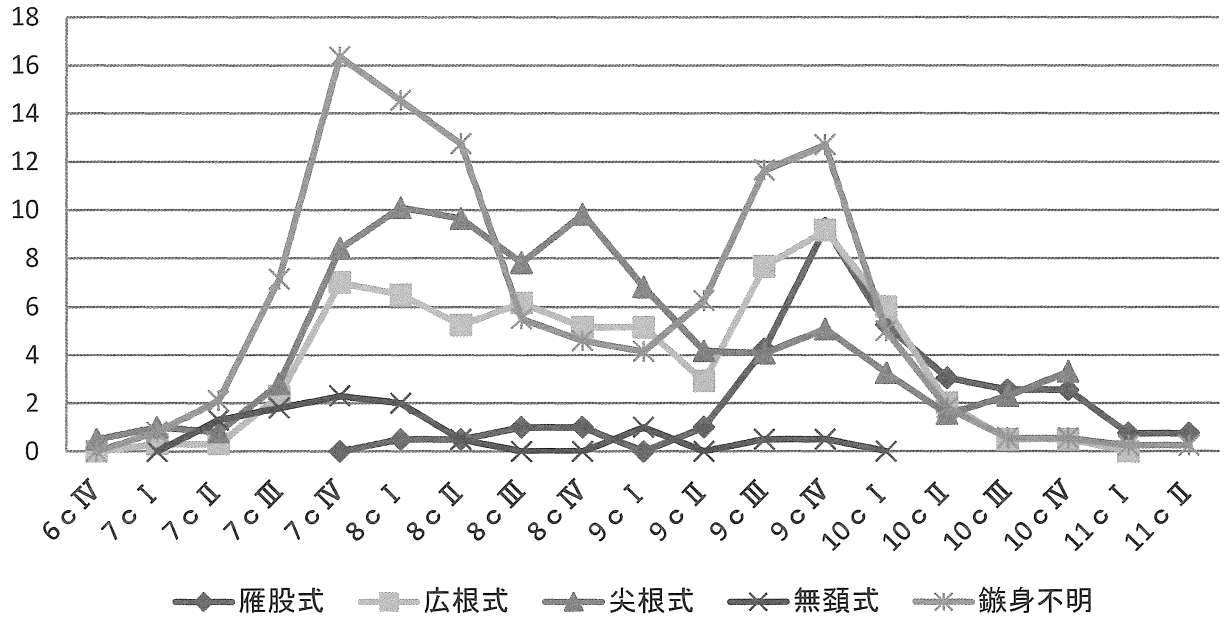
尖根式が９世紀初頭頃以降に減少していく理由のひとつとして、軍団兵士制に関連する可能性も考えられる。『類聚三代格』延暦十一年（792）六月七日の勅により、軍団兵士制は辺境要地を除き廃止された。尖根式の鉄鏃が減少する契機となった政策とも考えられよう。

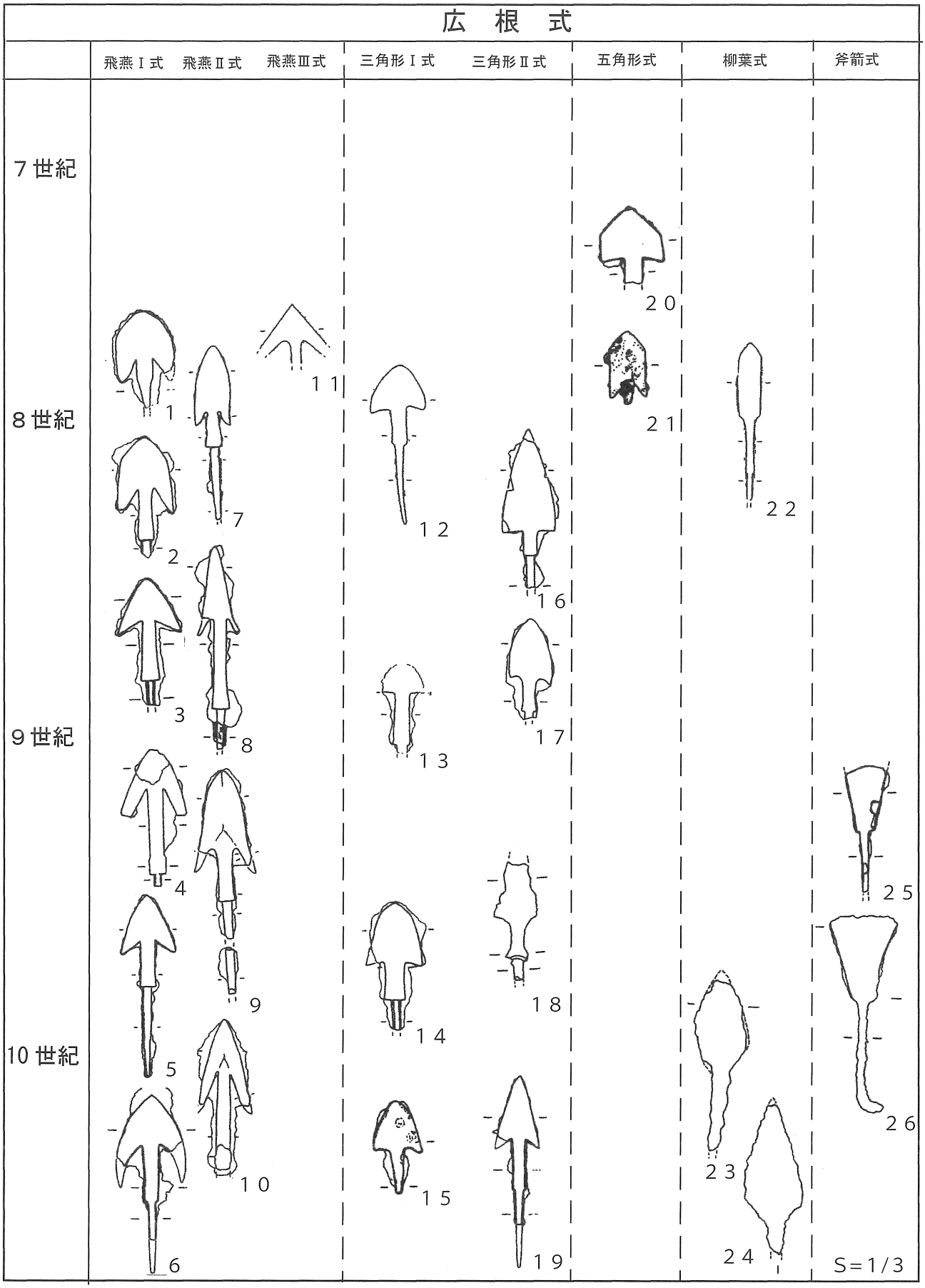
尖根式が減少していく過程で広根式と雁股式が増加していくが、本論の分類上、三角形式などに含まれた大型の長三角形型の鉄鏃などが尖根式の鉄鏃にかわって征矢になっていく可能性が想定されている。

飯塚武司は多摩川流域の鉄鏃を集成し６世紀前半から 11 世紀代にかけての間に４つの画期があるとしている。そのなかで第３の画期として９世紀後半から 10 世紀中頃を挙げ、「主流となる鉄鏃の大きな型式変化は、「律令軍団」の矢から「兵（つわもの）」の矢への動きと対応するものととらえられる。」としている（飯塚 1991）。

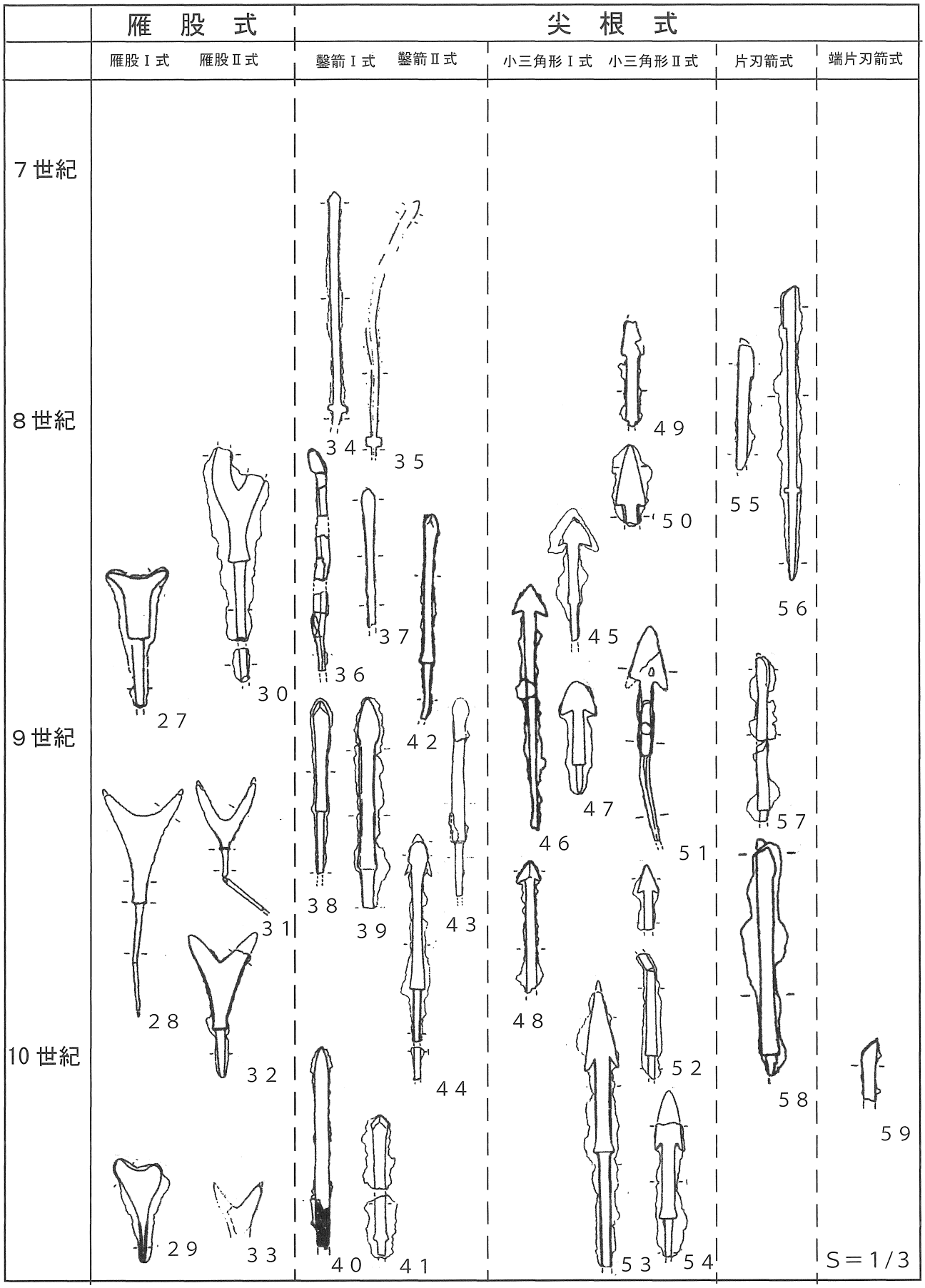
今回、検討した埼玉県地域では９世紀前半頃に

第 14 表　鉄鏃出土量の推移





第３図　鉄鏃変遷図（広根式）



第4図　鉄鏃変遷図（雁股・尖根式）

尖根式と雁股式、広根式の出土量が逆転する。これは多摩川流域よりも先行して埼玉県地域において画期が訪れたという可能性も想定される。

また、今回の集成では、7世紀後半から8世紀前半頃にかけて箆被に棘が伴うタイプが多く見られた。このタイプ（第4図―34・35・41・56）は点数こそ減っていくが10世紀代まで見られた。

4．城柵遺跡との比較検討

前述の通り、筆者は城柵遺跡から出土した鉄鏃を集成したことがある（渡邊2015）。その成果としては、表15に示した通り、城柵遺跡から出土した鉄鏃の81％が尖根式の形式のものであった。この形式の鉄鏃は有職故実研究においては征矢として位置付けられており（鈴木1959a・b）、主に戦で使用する形式のものである。三十八年戦争や元慶の乱という実戦の舞台となった城柵遺跡は律令国家の最前線であったことからも尖根式の鉄鏃（征矢）が主体を占めたことが理解できる。

対して、今回集成を行った埼玉県内の遺跡から出土した鉄鏃の内、鏃身の形式が判別可能のものの内訳を表16に示した。それによると、尖根式が44％、広根式が36％、雁股式が15％、無頸式が5％であった。城柵遺跡とは異なり、数多くの征矢が必要な環境にはなかったと思われ、鉄鏃の多くは狩猟用、すなわち、野矢として使用されていたと思われる。

また、一つの遺構からまとまって鉄鏃が出土した事例は多くても3点ほどであり、一括性は乏しい（註7）。

狩猟に用いられる野矢は主に鳥獣に対して射るものであり、獲物を仕留めることができればその獲物に矢が刺さっているか付近に落ちているはずであることから、回収も比較的容易であると考えられ、征矢と比べ、多く所有する必要はなかったものと思われる。

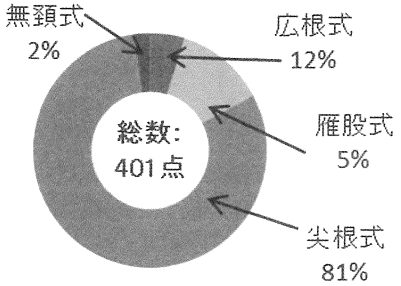
征矢と想定できる尖根式の鉄鏃もまとまって出土した例は認められなかった。このような尖根式の鉄鏃については軍団兵士として赴任した際に与えられたものを持ち帰られるなどし、集落内において野矢の代わりとして使用されていたために単体で竪穴住居跡から出土するという可能性も考えられよう。

また、前述の通り、7世紀後半から8世紀前半頃を中心に箆被に棘が伴うタイプが多く見られた。その一方で、城柵遺跡においては筆者が集成した限りでは、箆被に棘が伴うタイプの鉄鏃は多賀城跡に関連する遺跡である山王遺跡において2点確認できたに過ぎなかった。

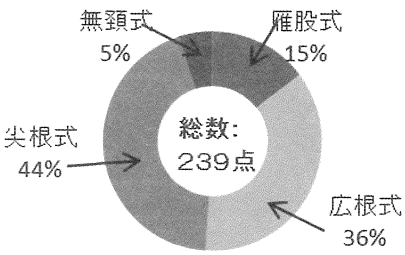
棘箆被の鉄鏃は埼玉県地域においては点数こそ減っていくものの10世紀代まで出土しているのに対し、城柵遺跡からはほとんど出土していない。

棘箆被の鉄鏃は東北地方南部においては、TK43型式期頃（6世紀後半頃）から普及する全国的な状況と一致するという（廣谷2008）。律

第15表　形式毎の比率（城柵遺跡）



第16表　形式毎の比率（埼玉県の遺跡）



令期以前から普及していたタイプの鉄鏃といえるが、城柵遺跡においては普及しなかったようである。城柵遺跡においては、在地の伝統的な鉄鏃ではなく、規格的な鉄鏃が主流であったといえる。

『養老律令』「営繕令」営造軍器条に「凡営造軍器、皆須依様」とあり、軍器（武器・武具）の生産は「様（ためし）」（手本・見本）に依って行うことになっている（中村 1995）。

『続日本紀』においても霊亀元年（715）五月甲午条に、「今六道諸國。營造器仗。不甚牢固。臨事何用。自今以後。毎年貢様。巡察使出日。細爲校勘焉。」六道諸国（西海道を除く）の造営する武器はしっかりしたものではなく、臨時の際にどうするのか、以後毎年、見本を提出させ、巡察使が出向いた際に調べさせよとあるように武器・武具生産の掌握が図られていた様子が窺える。

このように本格的に律令制が施行される７世紀末～８世紀初頭頃にかけて国家は武器・武具の管理を徹底させようとしていた様子がみえる。多賀城跡や秋田城跡といった城柵は律令国家の直轄施設であることから、このような管理の下で鉄鏃も扱われていたと考えることができる。

それに対して、今回集成の対象とした埼玉県域では 10 世紀代頃まで、点数こそ減少するが伝統的な鉄鏃が使われていたと考えられる（註８）。

おわりに

以上、古代社会において武器としての鉄鏃が最も多く消費されたと考えられる城柵遺跡との比較を行うことによって集落内での鉄鏃の在り方についての検討を行ってきた。その結果、埼玉県地域では城柵遺跡に比べて尖根式の比率が低いということが明らかとなった。これは、広根式等の鉄鏃が武器以外の目的で使用されていたことの現れであり、その主な使用目的は狩猟に関わると考えられる。

その一方で、関東地方は征夷戦争の兵站地に位置付けられており、多くの人や物資が東北地方に送られていたとされる。しかし、埼玉県地域ではある程度の出土量が認められた棘箆被の鉄鏃が城柵遺跡からはほとんど出土しておらず、これは、軍団兵士などは地元地域で使用していた鉄鏃を自弁していた可能性が低いか、あるいは自弁して城柵に持ち込まれた鉄鏃が修理、ないしは鉄素材としてリサイクルされる過程で棘箆被の無いタイプへ再生産されていた可能性があったとの想定ができる。

今回は埼玉県内の遺跡から出土した鉄鏃を検討の対象として取り上げたが、東京都や神奈川県東部といった地域を取り上げなければ、武蔵国の様相とすらいえず、武蔵国府跡も検討の対象外となってしまった。

より地域や時代を広げて検討を進めていくことで鉄鏃の使用状況、ひいては生業や戦、あるいは今回は検討を行えなかった鉄鏃の祭祀的な使用などの実態に迫れるだろうと考える。

また、今回は個別の出土状況からの検討を行うことができなかった。あわせて今後の課題としたい。

註１　大村直が「きわめて微視的ではあるが抽出しうる諸要素をすべて同列的な形式的範疇において処理」しているとの指摘（大村 1983）や、上野恵司が「後藤が古墳時代の鉄鏃に精通していたためか、その分類に細かい基準がもうけていなかった」（上野 1997）とされるなどの見解も見られ問題点も残る。

註２　小森哲也は出土地点が明示されていない、同系統のものを羅列するなど、分類基準が曖昧であるという指摘をしている（小森 1984）。

註３　的矢については鏃ではなく平題（いたつき）を用いていたとされることから鉄鏃から的矢の検討はできない。

註４　欠損していて全長が分からないものについては、城柵遺跡で集成した際には、完形でも長くて約 20㎝以内

であったため、鏃身の長さを6倍した際に20cmを超えないものを6頭身以内の小三角形式とし、超えるものを三角形式として位置付けておく。

註5　本稿で行った集成は各遺跡の調査報告書によって鉄鏃として扱われているものを取り上げた。なかには遺存状態が悪く鉄鏃とは断定できない資料も含まれている。未報告資料は一切含まれない。また、筆者の力量不足により多々遺漏がある。今後補填していき、より精度を高めていきたい。

註6　一部、前後する時期から継続的に鉄鏃が出土している遺跡に関しては、その遺跡の性格を考える上で前後する時期の鉄鏃も含めている。

註7　それぞれ異なる部位が同じ遺構から出土している場合、同一個体のものである可能性も考えられる。

註8　この現象は軍団兵士や鎮兵が鉄鏃を自弁していなかった可能性の証左ともなりえる。この問題は今後、他の地域も含めて慎重に検討していきたいと考える。

引用・参考文献

赤熊浩一　2011　「埼玉県の古代生業」『一般社団法人日本考古学協会2011年度栃木大会　研究発表資料集』pp.538～551

飯塚武司　1991　「鉄鏃―その時代性と地域性―」『東京都埋蔵文化財センター研究紀要X』pp.251～273

市川隆之　2011　「律令揺籃期前後の佐久地方の特殊性（予察）」『長野県考古学会誌』135・136号　pp.40～66

上野恵司　1997　「総の鉄鏃集成について」『多知波奈考古』第2号　pp.24～29

大村　直　1983　「弥生時代における鉄鏃の変遷とその評価」『考古学研究』30巻3号　pp.71～90

劔持和夫　2009　「神矢考　―反町遺跡祭祀跡に見る古代武歩神事―」『研究紀要』第24号　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

小久保徹・浜野一重・利根川章彦・山本　禎・高橋好信・田中正夫・岩瀬　譲・瀧瀬芳之　1984　「埼玉県における古墳出土遺物の研究Ⅰ―鉄鏃について―」『研究紀要　1983』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　pp.1～73

後藤守一　1939　「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』第54巻第4号　pp.1～29

後藤守一　1940　「正倉院御物矢」『人類学雑誌』第55巻第10号　pp.26～37

小森哲也　1984　「栃木県内古墳出土遺物考（一）―鉄鏃の変遷―」『栃木県考古学会誌』第8　集pp.53～92

小林謙一　2004　「Ⅳ―2　武器．武具」『古代の官衙遺跡　Ⅱ遺物・遺跡編』pp.94～97　独立行政法人　文化財研究所　奈良文化財研究所

小林康幸　1997　「中世鉄鏃研究ノート　―合戦の鏃、そして儀仗の鏃―」『多知波奈考古』第2号　pp.14～22

末永雅雄　1941　「主要武器（二）」『日本上代の武器』弘文堂書房　pp.255～294

末永雅雄　1969　「日本鉄鏃形式分類図」『浜田耕作先生追憶　古代文化論攷　古代学』pp.272～296

末永雅雄　1981　「第三章　弓矢」『増補　日本上代の武器　本文篇』pp.523～545　木耳社

杉山秀宏　1988　「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第八　pp.529～644　橿原考古学研究所

鈴木敬三　2014a　「矢の構成―有職故実の研究　弓矢篇　矢の部―」『武器と武具の有職故実』pp.365～407　吉川弘文館（初出　1959a『國學院高等学校紀要』第1輯）

鈴木敬三　2014b　「征矢野矢的矢考」『武器と武具の有職故実』pp.408～428　吉川弘文館（初出　1959b『國學院雑誌』11月号）

種石　悠　2014　「第4章　古代狩猟の実態と民族考古学」『古代食料獲得の考古学』pp.151～211　同成社

津野　仁　1990　「古代・中世の鉄鏃―東国の出土品を中心にして―」『物質文化』第54号　pp.59～75

津野　仁　1999　「古代の鍛冶遺構と鉄器生産―軍事と官衙造営の関連から―」『1999年度（第6回）鉄器文化研究集会　東北地方にみる律令国家と鉄・鉄器生産』pp.80～88　鉄器文化研究会

津野　仁　2001　「中世鉄鏃の形成過程と北方系の鉄鏃」『土曜考古』第25号　pp.185～205

津野　仁　2002「古代鉄鏃からみた武器所有と武器政策」『栃木史学』第16号　pp.40～69
津野　仁　2007「古代西日本の鉄鏃―地域性と古墳時代との関連―」『古墳文化Ⅱ』pp.99～115
中村光一　1995「令制下における武器生産について」『律令国家の地方支配』pp.304～337　吉川弘文館
平野　修　1989「奈良・平安時代集落出土の鉄鏃をめぐる若干の問題―山梨県内を中心として―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第1集　pp.87～108
廣谷和也　2008「東北南部における古墳出土鉄鏃の変遷」『古文化談叢』第60集　pp.107～128
松村恵司　1995「鉄鏃と建築儀礼」『山梨県考古学協会誌』第7号 pp.17～20
渡邊理伊知　2015「城柵遺跡における鉄鏃について」『宮城考古学』第17号　pp.99～116

図版出典【図3・4遺物番号：集成資料出典―報文図版―遺物№】

第1図　筆者作成
第2図　筆者作成
第3図　1：13-291-3　2：52-249-12　3：68-269-15　4：26-49-4　5-61-10-46　6：71-188-1
7：70-35-12　8：20-22-15　9：55-369-27　10：47-952-27　11：64-35-40　12：63-166-62
13：84-223-6　14：52-249-11　15：60-49-52　16：20-22-14　17：27-91-10　18：19-256-24
19：71-188-2　20：57-35-23　21：60-20-211　22：63-182-7　23：19-256-21　24：19-256-21
25：37-180-14　26：19-256-3
第4図　27：21-29-21　28：67-206-357　29：23-24-6　30：52-249-14　31：67-206-358　32：47-952-38
33：71-188-8　34：64-184-6　35：65-148-16　36：36-311-7　37：64-181-15　38：13-231-7
39：42-908-6　40：19-256-40　41：45-700-29　42：54-93-24　43：53-59-1　44：78-193-25
45：38-227-14　46：89-23-45　47：58-197-17　48：61-10-47　49：57-165-110　50：53-388-13
51：36-105-15　52：78-74-12　53：47-952-23　54：47-952-24　55：55-362-62
56：28-598-29　57：54-45-15　58：22-69-18　59：71-188-3

集成資料出典

1：赤熊浩一　1999『宮西遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第250集
2：赤熊浩一　2000『熊野 / 新田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第251集
3：赤熊浩一　2005『中山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第313集
4：赤熊浩一・井上尚明・岩瀬　譲・富田和夫　1988『将監塚・古井戸　古墳・歴史時代編Ⅱ　第1分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第71集
5：赤熊浩一・井上尚明・岩瀬　譲・富田和夫　1988『将監塚・古井戸　古墳・歴史時代編Ⅱ　第2分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第71集
6：赤熊浩一・岡本健一・松岡有希子　2005『下田町遺跡Ⅱ（第2分冊）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第301集
7：赤熊浩一・岡本健一・松岡有希子　2005『下田町遺跡Ⅱ（第3分冊）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第301集
8：磯崎　一・中山浩彦　2006『下田町遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第320集
9：井上尚明・富田和夫・赤熊浩一・小林美子・沼田　勉　1986『将監塚・古井戸　古墳・歴史時代編Ⅰ　第1分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第64集
10：井上尚明・富田和夫・赤熊浩一・小林美子・沼田　勉　1986『将監塚・古井戸　古墳・歴史時代編Ⅰ　第2分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第64集
11：岩瀬　譲　1998『地神 / 塔頭』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第193集

12：岩瀬　譲　2011 『皂樹原・檜下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 376 集
13：岩瀬　譲・大谷　徹・栗岡　潤　2003 『如意遺跡Ⅳ　第 1 分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 285 集
14：岩瀬　譲・大谷　徹・栗岡　潤　2003 『如意遺跡Ⅳ　第 2 分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 285 集
15：岩田明広　1998 『今井条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 192 集
16：岩田明広　1998 『宮ノ後遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 226 集
17：上野真由美　1998 『耕地遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 204 集
18：大谷　徹　2013 『天神台東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 404 集
19：大塚孝司・寺内正明・小島健一　1989 『椿山遺跡　―第 3 ・ 4 次調査―』埼玉県蓮田市文化財調査報告書　第 13 集
20：大和田瞳　2011 『大山遺跡　第 13・14 次』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 379 集
21：金子直行　2002 『八木崎遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 281 集
22：木戸春夫　2010 『宮町遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 367 集
23：木戸春夫・桜井元子　2003 『宮西遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 288 集
24：木戸春夫・田中広明　2012 『皿沼西 / 戸森前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 391 集
25：木戸春夫・西井幸雄　1992 『荒川附遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 112 集
26：君島勝秀・田中広明・成田友紀子・高田賢治・梅沢太久夫　2002 『谷ツ遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 282 集
27：栗岡　潤　2000 『如意 / 如意南』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 241 集
28：栗岡　潤・大屋道則・劔持和夫　1998 『築道下遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 199 集
29：黒坂禎二　2008 『牛原 / 御新田 / 番匠・下道 / 横沼新田 / 北谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 353 集
30：黒坂禎二・中村倉司　1987 『下辻遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 69 集
31：黒坂禎二・中村倉司　1988 『小山ノ上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 70 集
32：小林　高　2015 『上宿・台遺跡（第 2 次）』寄居町遺跡調査会報告　第 38 集
33：小宮雪春・田中和之　2008 『関山貝塚―第 4 次調査地点―　根金大山遺跡―第 2 次調査地点―　荒川附遺跡―第 21 次調査地点―』埼玉県蓮田市文化財調査報告書　第 45 集
34：斎藤　稔・早川由利子　1993 『若葉台遺跡Ｏ・Ｐ・Ｑ・Ｒ・Ｔ地点、富士見西児童公園発掘調査報告書』鶴ヶ島市遺跡調査会
35：篠崎　潔　1990 『皂樹原・檜下遺跡Ⅱ（奈良・平安時代編 1 ）』皂樹原・檜下遺跡調査会報告書　第 2 集
36：篠崎　潔　1991 『皂樹原・檜下遺跡Ⅱ（奈良・平安時代編 2 ）』皂樹原・檜下遺跡調査会報告書　第 3 集
37：篠崎　潔　1992 『皂樹原・檜下遺跡Ⅱ（奈良・平安時代編 3 ）』皂樹原・檜下遺跡調査会報告書　第 4 集
38：鈴木孝之　2004 『古宮 / 中条条里 / 上河原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 298 集
39：鈴木孝之・岩瀬　譲・加藤隆則　2007 『飯積遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 333 集
40：鈴木孝之・岩瀬　譲・加藤隆則　2007 『飯積遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 334 集
41：鈴木秀雄・富田和夫　1982 『伴六』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 11 集
42：瀧瀬芳之・山本　靖・西井幸雄・村田章人・三浦佳代　1993 『上敷免遺跡　第 4 分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 128 集
43：田中和之・寺内正明　1989 『荒川附・宿下遺跡』蓮田市教育委員会調査報告書　第 14 集
44：田中広明　2002 『北島遺跡Ⅴ　第 1 分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 278 集
45：田中広明　2002 『北島遺跡Ⅴ　第 2 分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 278 集

46：田中広明　2004 『北島遺跡Ⅸ　第１分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 293 集
47：田中広明・末木啓介　1997 『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 190 集
48：知久裕昭　2012 『幡羅遺跡　Ⅷ』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 127 集
49：寺内正明　1989 『荒川附遺跡　―第６次調査―』埼玉県蓮田市遺跡調査会調査報告書　第４集
50：富田和夫　1992 『稲荷前遺跡（Ａ区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 120 集
51：富田和夫　1998 『在家遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 220 集
52：富田和夫　2000 『大寄遺跡Ⅰ―第１分冊―』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 268 集
53：富田和夫　2000 『大寄遺跡Ⅰ―第２分冊―』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 268 集
54：富田和夫　2002 『熊野遺跡（Ａ・Ｃ・Ｄ区）　第１分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 279 集
55：富田和夫　2002 『熊野遺跡（Ａ・Ｃ・Ｄ区）　第２分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 279 集
56：富田和夫　2002 『熊野遺跡（Ａ・Ｃ・Ｄ区）　第３分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 279 集
57：富田和夫　2007 『荒川附遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 338 集
58：富田和夫・山本　靖　2010 『銭塚Ⅱ / 城敷Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 369 集
59：富元久美子　2012 『飯能の遺跡（39）』飯能市教育委員会
60：鳥羽政之・竹野谷俊夫　2001 『熊野遺跡Ⅰ』岡部町遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書　第９集
61：西井幸雄・瀧瀬芳之　2006 『宮台・宮原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 318 集
62：西井幸雄・渡辺清志　2010 『中道・中道下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 371 集
63：根元　靖　2010 『東の上遺跡　―飛鳥・奈良・平安時代編　Ⅰ―』所沢市埋蔵文化財調査報告書　第 49 集
64：根元　靖　2011 『東の上遺跡　―飛鳥・奈良・平安時代編　Ⅱ―』所沢市埋蔵文化財調査報告書　第 53 集
65：根元　靖　2013 『東の上遺跡　―飛鳥・奈良・平安時代編　Ⅲ―』所沢市埋蔵文化財調査報告書　第 59 集
66：福田　聖　2013 『代正寺Ⅲ / 大西Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 402 集
67：福田　聖・赤熊浩一　2009 『反町遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 361 集
68：福田　聖・金子直行・永井いずみ　2002 『大寄遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 280 集
69：宮瀧交二・大谷　徹　1991 『宮町遺跡　―Ⅰ―』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 96 集
70：宮本直樹・竹野谷俊夫　2002 『町内遺跡Ⅲ』岡部町埋蔵文化財発掘調査報告書　第７集
71：山形洋一・渡辺正人・佐藤幸恵・笹森紀己子・宮崎由利江・関　義則・石井葉子・林　宏一・小池裕子　1993 『氷川神社東遺跡・氷川神社遺跡・Ｂ―17 号遺跡』大宮市遺跡調査会報告　第 42 集
72：山田尚友　2000 『東裏西遺跡（第２次）・東浦遺跡（第４次）・下野田稲荷原遺跡（第３次）・大門西裏南遺跡（第２次）発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書　第 277 集
73：山本　禎　1991 『山王裏・中原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 98 集
74：山本　禎　2001 『如意遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 264 集
75：山本　禎　2004 『如意南遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 294 集
76：山本　禎　2005 『飯塚北遺跡　第１分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 306 集
77：山本　禎　2005 『飯塚北遺跡　第２分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 306 集
78：山本　禎　2006 『飯塚北Ⅱ / 飯塚北古墳群Ⅱ　第１分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 321 集
79：山本　禎　2006 『飯塚北Ⅱ / 飯塚北古墳群Ⅱ　第２分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 321 集
80：山本　禎　2009 『まま上遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 358 集
81：山本　禎・岩瀬　譲　2002 『如意Ⅲ / 川端　第１分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 276 集
82：山本　禎・岩瀬　譲　2002 『如意Ⅲ / 川端　第２分冊』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 276 集
83：山本　禎・西井幸雄　1997 『山王裏 / 上川入 / 西浦 / 野本氏館跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 184 集
84：山本　靖　2000 『築道下遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 246 集

85：油布憲昭　2013 『飯能の遺跡（40)』飯能市教育委員会
86：横川好富・酒井清治　1984 『台耕地（Ⅱ)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第33集
87：横川好富・増田逸朗・水村孝行・中島　宏・鈴木仁子・島村範久　1981 『清水谷・安光寺・北坂』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第1集
88：吉野　健　2001 『諏訪木遺跡』熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財報告書
89：吉野　健・長谷川一郎・原野真祐　2010 『宮下遺跡Ⅱ』埼玉県熊谷市宮下遺跡調査会埋蔵文化財報告書
第1集

研究紀要　第30号
—設立35周年記念—
2016
平成28年3月14日　印刷
平成28年3月18日　発行

発　行　公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369－0108　熊谷市船木台4丁目4番地1
http://www.saimaibun.or.jp
電　話　0493－39－3955
印　刷　朝日印刷工業株式会社